
おまもりやどり

虎太郎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

おまもりやどり

【Nコード】

N5990Y

【作者名】

虎太郎

【あらすじ】

神社のお御籤で大凶を引いてしまった不幸な少年、石動 宗一郎。

彼は神主に唆され、3000円のお守りを購入してしまう。

翌朝、彼のお守りに宿っていたのはなんと生まれたばかりの神様「天之子之命」だった――。

身長10cmの小さな神様が生み出す、ハートフルはちゃめちゃストーリー。

神道バカの虎太郎がお送りする、二作目の神様シリーズ。
250人中、7位に入選した優秀作品です。
どうぞ、ご覧下さいませ。

壱 『不幸は突然にやってくる』（前書き）

この作品は「15000文字以内」というお題で作られた作品です。

初めて虎太郎の作品をご覧になる方も、二度目になる方も、どうぞ、ごゆるりと神様ストーリーを堪能くださいませ。

（タイトルを見て「おまもり。まりじゃねえか！」と思われた方もぜひ一度、ご覧下さいませ）

壱 『不幸は突然にやってくる』

物事はいつだって、こつちの事情など関係なく訪れる。

そして不幸は突然やってくるのだ。

気晴らしに天ヶ先神社に立ち寄って、気まぐれにお御籤みくじを引いた。
ただ普通に、何気ない一日を過ごしていただけなのだ。

「——何だ、コレは」

思えばこのとき、お御籤で大凶を引いてしまったこと自体が、これから続く不幸の始まりだったのかも知れない。

手の中にある紙切れから禍々しいモノが煙のように立ち上っているようだった。もっとも、その神様からの不幸なお告げを引いてしまった不幸な少年、石動宗一郎いすけむねいちろうに靈感などあるはずもなく、それが目に見えたわけではない。

大凶——お御籤の中で最も悪いとされるお告げ、運勢のびりつけつ。大凶という禍々しい文字の隣には、可愛らしい花柄に囲まれて「あなたの花は黒百合くろゆりです」と書かれていた。

さらに隣には花言葉が。恐る恐る目線を横へと移す。

……ちよつと待て、黒百合の花言葉は？ 呪い？ じゃないか！

何でそんな不幸な花を載せてあるんだ。

やんわりと彩いろどられている花柄でさえ恨めしく思えてくる。

『【運勢】大凶——夢も希望もありません。努力をすればする程、底無し沼にはまったかのように深い闇に沈んでいきます。ここはひとまず落ち着いて行動をして、良い運氣が流れてくるよう待ちましょう』

逡巡しゆんじゆんの迷いなく手の中で紙クズ同然に握りつぶすと、お社やしろを背にして力の限り投げ捨てた。丸められたお御籤は弧を描いて、町の景色が広がる階段のむこうへと消えていく。

ざまあみる。

ふん、と鼻息を荒げて神社を後にしようと、お御籤が消えていった階段へと足を踏み出した。

突然、足元がぐらりと揺れ、大きくバランスを崩す。自分の足の裏に大きな石があり、気づかずに足を乗せてしまったときには、既に階段が目の前に迫っていた。

地面と空とが繰り返して視界に入ってくる。同時に全身に痛みが走る。

世界が八度ほど回った後、階段下の石畳へ背中を打ちつけてようやく止まった。

頭に浮かんだのは大凶の二文字。むしゃくしゃして、頭を掻きむしる。栗色の髪が宗一郎の心境を表しているかのように、乱暴な形になる。

「おやおや、どうなされました」

天を仰ぐ宗一郎の目の前にクシャクシャのお御籤を手にした、白い着物の男が覗き込んできた。

「ははあ、それはまた災難でしたねえ………」

あらかた説明をし終えたと、この神社の神主だかんぬしと名乗る男は微笑みながら何かを差し出してきた。

神主の手の上には、赤や白の紐が幾重いくえにも編み込まれたお守りらしきものがあつた。

「お守り……です、か？」

「その通りですな。ただし、その社務所つむしょで売っているような代物じゃあないですがね」

神主は宗一郎へ顔を近づけると、にたあと笑いながらお守りを目線の高さまで持っていく。

「このお守りは代々、この神社に伝わる特別な祈祷を経て作られたお守りでしてねえ」

と、神主はお守りの紐を摘むと、振り子のように動かす。

「開運なんてモンじゃあないですよ。なんせ悪霊を払うための強力な護符こふなんですから。だから大凶なんて出ても、これを持っていれば関係ないですよねえ」

思わず生唾を飲み込んでしまう。喉から手が出る、というのはこの事だろう。

今まさに、揺れ動くソレを掴み取ろうと右手に力が入っているのだから。

「——一万円」

「……高いッ」

「の所なんです、見たところ学生さんですよね？」

よれよれのズボンに大きくはみ出している白地の半袖シャツ。胸ポケットには宗一郎が通っている桜花学園おうかを示すバッチバッチが煌々くわくわと輝いている。

虚を衝かれて押し黙っている宗一郎を気にも留めず、神主は続けた。

「学割っていうのかな？　それで大まけのおまけ、三千円つてのはどうかねえ？」

「たか——」

「これ以上は割引できませんなあ。それに……いらないうらいんですよ」

神主は急に興味を失ったかのように、社務所へと踵きびすを返そうとする。

階段へ足をかけた所で、宗一郎の右手が神主の袴はかまを掴んだ。

「買う、買うよ！」

冷めた神主の眼に光が戻る。先程の態度が嘘のように微笑んだ。

「毎度ありい」

宗一郎の背中を見送る神主に、一人の巫女が近づいた。

「神主様」

「——なんでしょう」

「また、お御籤の中身を替えましたね？」

「——はて？」

「また、お守りを不当な価格で売り払いましたね？」

「——はて？」

「あれ、安産祈願のお守りですね？ 七百円の」

「——ええ。でも、ちゃんと中の紙を入れ替えたのでいいじゃないですか」

「神主様——！！」

その夜、宗一郎は買ったお守りをジツと見つめていた。

お守りを何処どこにつけようか悩んでいたが、やはり一番身近にある携帯電話に結わいつけた。

うん、何だか頼もしく見える。

宗一郎は目覚まし時計のアラームをセットして、携帯電話を枕元に置いた。

きっと明日には平穏な日常が戻っているに違いない。そう祈って宗一郎はゆっくりと瞼まぶたを閉じた。

壱 『不幸は突然にやってくる』 （後書き）

階段を転げ落ち、さらには神主には誑たがひかされた宗一郎。

不幸続きの少年は、平穩が訪れるようにと、その胸に希望を抱き、眠りにつく。

翌朝、彼はその願いが永遠に叶わぬ夢だということに気づかされるのだった――

次回 『神様も突然にやってくる』

どうぞ、ご期待あれ。

式 『神様も突然にやってくる』

宗一郎は毎日けたたましい目覚まし時計の電子音で起きていたが、その日は珍しくアラームの時刻よりも早く起きた。

「く……ああ」

深い眠りに入っていたのか、一度も起きることがなかったため目覚めは良好だ。

大きく背伸びをして枕元にある携帯へと手を伸ばしたとき、ふと可愛らしいものが宗一郎の目に入った。

「ん、くう」

携帯電話の大きさと同じくらい、もしくは一回り小さいくらいの女の子だった。

それが携帯電話の上で猫のように丸まっており、静かに寝息をたてていた。

白い着物に足首まで覆われた赤の袴……いわゆる巫女装束みこしょうぞくというやつだろうか。

髪は縮こまった身体と同じくらいまで伸びており、烏の濡羽色からすぬればいろが水の上で揺らめくように、白い携帯電話の上に広がっている。

「んう」

初め、宗一郎はそれが人形か何かだと思った。

手のひらに納まるくらい小さな人間など、いないからだ。

しかし微かに上下する胸が『生きている』と語っていた。

その光景に呆然ぼうぜんとしていたが、寝返りをうつ少女を見ると、胸の奥が妙にくすぐつたくなった。

宗一郎は己が心の思うままに、右の人差し指で少女の頬ほおを突つく。感触は——とても柔らかかった。

女の子の身体は電気が走ったかのようにビクンと震えると、先程より一層縮ここまってしまう。

その仕草を目の当たりにし、小さい頃ハムスターを突いたときに

感じた、言い知れない感情が宗一郎の胸中に広がる。

さらに二回、突いた。

「く……うう」

四回ほど突いたあたりで、少女の額に筋が浮かび上がる。

それに気づかないまま宗一郎はもう一度指を近づけ——絶叫した。

「いつつてえー!!」

慌てて指を引っ込めると、携帯電話の上で犬のように唸る少女の姿があった。

痛む指を見ると、小さな歯形がついていた。

「痛いのはこっちのほうさ。酷いね、人が気持ちよく眠っているのに、不埒だよ」

自らの袖で下半身を庇い、小悪魔のような笑みを浮かべた。
着物が弛んで胸元が露になった姿は、普通、健全な男子にとって目に毒な光景である。

が、目の前の少女は小さすぎる上に胸が板であるため、虫眼鏡でも持ってこないと色気の欠片さえ感じられない。

「いや……そもそもお前、誰なんだよ。しかも人の携帯の上で……なにしてんだ」

「ん？ 『けーたい』……」

およそ重力というものを感じさせないような身のこなしで、ふわりと浮き上がるように少女は立ち上がる。

「これかい？ 『けーたい』というのは」

青竹踏みのように、何度も携帯電話を乱暴に踏み荒す。

「あ」

すると、少女の足元から光が現れ、携帯電話を照らした。

光の泉、と言えはいいのだろうか。白き光源が少女の両足の間で明滅している。

携帯電話の光ではない。

きれいだなあ、と思った矢先、何かの弾ける音が携帯電話から発せられた。

先程まで眩しかった光も、急速に失われる。

「やつちやつたみたいだ」

ばつが悪そうに、少女は宗一郎を見上げてそう言った。

背中にひやりとしたものを感じた宗一郎は、少女が携帯電話の上に乗っているにも関わらず、携帯電話を開いた。

ディスプレイの向こうで「おわっ」と悲鳴ひめいを上げて落ちてしまう少女。

その悲劇ひげきに眼もくれず、宗一郎は目の前の惨劇さんげきに大声を上げた。

「うわあああ！ 携帯が……」

液晶画面に無数のひび割れ線が走っており、電源ボタンを押しても反応はなかった。

ディスプレイのてっぺんから、申し訳なさそうに少女は顔を覗のぞかせた。

「ご、ごめんよ。つい力が……」

「力ってお前、一体何者だよ！」

「か——神だ」

式 『神様も突然にやってくる』（後書き）

宗一郎の願っていた平穏な日常は、ただ一人の少女によって打ち砕かれた。

体長10cm、黒髪ロングヘアに巫女装束。
自称神様のこの少女は、いったい――

次回『天之子之命』

どうぞ、ご期待あれ。

参 『天之子之命』前編

「あゝあ、本当に壊れちゃったよ」

学校へ向かうため電車を降りて、宗一郎は大通りを歩いていて。周りには多くの会社員やら学生やらがそれぞれの目的地へと向かっている。その中に宗一郎もいた。

「うう、謝ったじゃないか——キミも意地悪いじわるだなあ、いい加減許しておくれよ」

携帯電話の上で少女——もとい神様が、正座のまま縮こまっていた。

「それで……ええと、なんだっけ。名前」

「一天之子之命《あまのしのみこと》」

「そうそう、あまの……何だっけ」

「天之、子之、命！ 遠回しに人を虐めるいじのが好きみたいだね、キミは」

宗一郎の目の前で頬を膨らます自称『神』の少女、天之子之命。

「それで……アマノ、シノ、ミコト？ それ以外は何も分からないのか」

「……うん、残念ながら。僕は神と言ったけど、神階しんかいは下しもの下。キミたちが思い浮かべるような、全知全能ぜんちぜんのうの存在じゃないんだ」

発現はつげんしたばかり——そう彼女は言った。

携帯電話が壊れた後の……今朝の出来事を宗一郎は思い返した。

...

「何故なぜ、ここにいらっしゃるんだろうね」

自らを神と名乗った少女は、不思議そうに宗一郎へ聞いた。

「僕は、神具しんぐとして祀まつられている刀に宿るべきだったんだけど——何故、僕はここにいるんだい」

お守りの上で、まっすぐに宗一郎を見上げる天之子之命。少しだけ焦りの色が見えた。

「僕はそこに宿^{神具}らなければならんだ。ねえ、どうすればいいのかな」

「どうすればって……」

宗一郎はわけが解らなかった。朝起きたら小さな少女が寝ていて、触ったら噛み付かれて、携帯電話は壊されて、あげくの果てにどうすればいいかときたのだから。

「じゃあそこに行けばいいじゃないか。その、宿るべきシング？へ」

「行けたら苦労はしないんだけどね」

見ててよ、とお守りの上で歩き出そうとする天之子之命。お守りから十センチほど離れたかと思うと、天之子之命の眼前でバチバチと火花が散った。

見えない何かに阻まれたのか数歩下がり、肩をすくめる。

「ほらね。これ以上はお守りから離れられないんだ」

「どうして、なんだ？ どうして離れられないんだよ」

「恐らく、なんだけど……」

顎に手をあてがい、うーん考える。

「……誤^{あやま}って宿^{あやま}ってしまったみたいなんだ。このお守りに、ね」
どこか諦めた口調で、天之子之命は足元のお守りを指した。

参 『天之子之命』前編（後書き）

手違いによってお守りへ宿ってしまったという神様『天之子之命』。

生まれたばかりの彼女は、自らの境遇に戸惑っていた。そんな彼女を見越し、宗一郎は何気なく話題を変えていく。

そして彼女は、新たな名前を与えられるのだった――

次回『天之子之命』後編

どうぞ、ご期待あれ。

肆 『天之子之命』後編

「しかし、天之子之命って言いにくいな」

あまりにも落ち込んでいる天之子之命を見かねて、話題を変えるよう宗一郎は心がけた。

神様に気をつかうというのも変な話だ。

「天は空という意味で、高天原の一字を貰い受けたんだ。子は、その高天原で生まれた神を表すとして付けてもらった——僕は嫌いやあないな」

「じゃあ天は御天道様の天で、子は子供の子か？」

「うん。命は生命の命だけど、神を呼ぶときにはわざと抜く場合もあるんだ。言いにくいなら命を抜いてもらってもいいよ」

「じゃあ……天子ってのはどうだ？ ……無理やり天って読まなくていいだろ、別に」

口にした後、少し馴れ馴れしいことをしたなと宗一郎は思った。

まるで俺が彼女をあだ名で呼びたいみたいじゃないか。

そんな宗一郎の思いとは裏腹に、彼女は携帯電話の上でキラキラと瞳を輝かせていた。

「てんし……天子。ふふ、良い響きだね」

どうやら気に入った様子で、何度も頷いては「天子」と名前を確認するように自分に言い聞かせていた。

「どうやら、キミからも良い名を貰ってしまったね。嬉しいよ」
てへへ。気恥ずかしいのか、頬を掻く天子。

「そつえば、天子……本当に見えてないんだな、他の奴らに」
ふと、宗一郎は辺りを見回した。

大通りを行きかう誰しもが、前を向いて歩いている。

時折、宗一郎と目が合う通行人もいるが、すぐに視線を戻してしまふ。

誰一人として、携帯電話の上に座っている天子に、気づかなかっ

ただ。

「ほら、僕も一応は神だからね。人間に神が見える必要はないから、始めから見えないようになってるのさ。キミの場合は——多分、これのおかげかな？」

歩く振動でゆれるお守りを指差す。

「また、お守りか」

「そう、そもそもコレが空っぽなのが、おかしいんだ」

ちよこんと正座をしたまま、天子は説明を始めた。

「もともとお守りには加護の力が宿っているんだ。その力は微弱ではあるけれど、多少の悪霊や、それらがもたらす……いわゆる不幸な出来事から守ってくれるんだよ」

指を遊ばせながら、天子はすらすらと説明する。

その姿は神様というよりも神道好きの巫女さんだった。

「だけどね、このお守り……宿ってみて気づいたんだけど、中は空っぽ——空洞だったんだ。こんなの、ただの飾りよりも厄介だよ。僕が宿らなかつたら、最悪、悪霊が入っていたかも知れないから」

平然と恐ろしいことを言うてのける小さな神様。

「よっぽど適当に作ったのか、それとも神様なんていないと思ってる人が作ったのかな。これを売ってた神社には、近づかないほうがいいよ」

「はい、神様」

「なんだい、急に？　せつかくキミが付けてくれた名前があるんだ、そっちで呼んでおくれよ。て、天子——ってさ」

へへへ、と照れ笑いをする天子。

こいつは想像以上に馴れ馴れしいな、と宗一郎は思っていた。

肆 『天之子之命』後編（後書き）

宗一郎から貰った名前を、嬉しそうにかみ締める『天之子之命』こと『天子』。

しばしの時を共に過ごす中で、天子は少しずつ常識を覚えていく。そして、天子は問い詰めてしまう。彼と、彼の周りのことを――

次回『神様、トモダチって何だ？』
どうぞ、ご期待あれ。

伍 『神様、トモダチって何だ？』

——神様がお守りに宿って三週間。

どうやら神様はテレビが大層のお気に入りようで、暇さえあればテレビの観賞^{かんしょう}を催促^{さいそく}するようになった。

お守りから遠くへ離れられないため、一人でリモコンを操作することも敵わない天子。

必然的に、宗一郎がいなければテレビを見られない。

なんで無理矢理テレビを見なきゃいけないんだ。

宗一郎は「面倒」の一点張りで拒み続けた。

始めのうちは、ぶーぶーと文句を言うだけの天子だったが、最後には「リモコンを言霊に代えて携帯電話の中に宿らせよう」と言い始めた。

宗一郎は携帯電話を壊された一件を思い出し「天子ならまた壊しかねない」と頭に過ぎった。そのため、天子と一緒になくなるとテレビを見るハメになってしまった。

「ねえ、キミ」

「何だよ」

天子はテレビに釘づけだった。映されているのは、昨シーズン人気を博した学園ものの青春ドラマだ。男同士の深い友情を描いた作品らしい。

再放送が決定したらしく、たまたまテレビをつけたら一、二話が放映されていた。

宗一郎はあまり好きではなかったが、天子が見たがっていたので一緒に見ることにした。

天子は、後ろに座る宗一郎へ問いかける。

「トモダチって何か、わかるかい？」

小さな口に入るよう、細かく砕いたポテトチップスをほお張りながら、天子は答えを待つ。

「――動物で例えると群れ、だ」

「動物は自分たちを脅かす存在を恐れて、群れをなすものじゃないか。じゃあ、人間たちは何を恐れて群れているんだい？」

天子のその知識は先日、社会科の先生が授業中に語っていた内容だった。

誰も聞いてなかったのに、聞いていたんだな。俺と同じで。

宗一郎は苦笑し、口を開く。

「多分、それは『孤独』を恐れているんだと思う。人間は寂しがり屋なのさ、一人でいると寂しくて死んじゃうんだよ」

「ふうん……じゃあ、キミは寂しくないのかい？」

ぴくり、と宗一郎の肩が跳ねる。胸に針が刺さったかのように、心が痛む。

風呂やトイレといった場所を除いては、常に天子と一緒に過ごしていた。

修理から戻ってきた携帯電話に、お守りをつけたからだ。

だから学校も例外ではない。

そのため、天子は気になったのだろう。

ドラマの中では主人公と友人がいつも教室内でふざけあい、笑いあっている。

その光景を、天子は宗一郎の身近で見たことがないからだ。

宗一郎には、そう言った友達がいなかった。

男女共に入り乱れて騒ぎあう教室の中で、彼は一人だった。

いつも宗一郎は窓際で景色を眺め、そんな彼をみる天子。それが二人の学校生活だった。

「寂しくない」

ポテトチップスを咀嚼する音だけが、耳の奥で空しく響く。

「そっか。僕は、寂しいと思っちゃうかな」

手についたポテトチップスをペロリと舐めると、天子は振り返った。

「僕は一人だと寂しい。キミがいつも一緒にいてくれるから、今は

寂しくはない、かな」

テレビはちょうどコマーシャルに入ったようで、天子はグーツと背伸びをすると、身体も宗一郎へ向きなおした。

「きつと……宿るべきはずの神具カに宿っていたとしたら、僕は寂しかったと思うよ。一人で永遠に、誰とも言葉を交わすことなく、人々の信仰しんこうを受け続けるんだ」

淡々と天子は語る。

今、俺が聞いている言葉は神様の——天子の本音だろうか。

「でも、それが神なんだよね——ああ、僕は幸せ者だなあ。こうして毎日、キミと楽しく過ごせているのだから」

曇り一つない笑顔を向けられた宗一郎は、あることに気づいた。

そうか。天子と自分は似たもの同士だったのだ、と。

友達が——心を許しあえる人がいなかった。

なんだか急に胸がくすぐつたくなる。

それは、自らが友達みずかというものを遠ざけていた宗一郎が、初めて抱いた感情であった。

伍 『神様、トモダチって何だ？』（後書き）

お守りに縛られ、籠の鳥同然の天子は言う。「僕は幸せ者だ」と。
その言葉に戸惑いを覚える宗一郎だが、同時に彼の中で不思議な
感情が沸き上がる。

言い知れぬ感情が彼の心に纏わりつく。そして彼は思い出してし
まう。その感情の正体に――

次回『おまえと出会って』
どうぞ、ご期待あれ。

陸 『おまえと出会って』

「お前なら出来るだろ。何でもつと頑張んねえんだよ！」

それは遠い昔の記憶。

聞きなれた、とても懐かしい声だ。

「うるせえなあ……他人のくせにいちいち口出すなよ」

これは、自分の声。

「なんだよそれ。俺はお前に頑張ってもらおうとだな——」

「いちいちうつとうしいんだよ。何だお前、俺が何しようと勝手だろっ」

「はあ！？ 宗一郎——てめえ、そんな自分勝手な奴だったのかよ

……マジがっかりしたわ」

何が原因で口論くちろんしたのかは覚えていない。

ただ、あのときは自分のことを何も解とってないんだと、この友人を突つ撥はねてしまった。

「勝手にしろ」

自分のことをたいして知らない他人に、とやかく言われるのはうつとうしかった。

この頃から宗一郎は人を遠ざけていた。

だが、次第しだいに宗一郎の胸には言い表せない感覚が宿り始めた。

まるで燃料タンクねんりように穴が開いているかのように、自分の心から大切な何かが漏れている気分だった。

それを、ただの気のせいだと宗一郎は自分を騙だまし続けた。

本当は自分のことを解とってくれる友人が欲しいという、心の声から逃げていただけなのに。

ああ——くそ、胸糞むなくそ悪い。

そして、宗一郎の思考しこうが加速かそくする。眠りから覚めるのに、そう時間かんはかからなかった。

...

急速^{きゆうそく}に意識^{かくせい}が覚醒した宗一郎は、自らの部屋……ベッドの上で目をさました。

——何で今さら思い出すんだ。

大きくため息をついて、寝返りをうつとした。腕を投げ出して縮こまろうとしたとき、視界の端に携帯電話——天子が映る。

しまった。

宗一郎は右腕に渾身^{こんしん}の力を入れ、天子の数センチ上で見事に停止させた。

ムリに力を入れてしまったために痛む右腕をさすりながら、携帯電話の上で眠る天子を見つめる。

ピクン、と身体を震わせては寝返りをうつつ小さな神様。

微かな衣擦れの音が宗一郎の耳に届く。

「こんなやつがいなければ、悠々^{ゆうゆう}と両手を広げて寝れるってのになあ」

神様でも、一人は寂しいらしい。

初めて会った日の夜のこと。宗一郎は気をつかい、他の部屋で寝ようとしたのだが「神様は寝ないんだ。だからキミの隣で悪霊から守ってあげるよ」と言い出した。

だが天子は、宗一郎よりも早く眠りに就^ついてしまった。

本当に悪霊が退治出来るのかと思い、試しに『恐怖の心霊映像——百連発！』を見せたら「怖くて一人じゃあ眠れないんだ、僕と一緒に寝てくれ」と泣きついてきた。

今まで……家族以外の他人とこんなに長い時間を、共にしたことなんてなかった。

冷え切っていた何かが、天子という神様と出会ったことによつて温められ、満たされてくのを感^{かん}じた。

もしかしたら、自分は天子のことが——なんて、宗一郎は考えてしまう。

いや、違う。違うんだ。

宗一郎はかぶりを振る。

きつと、いつか天子も本来いるべき所に戻るんだ。

そうしたら、またいつもの日常が帰ってくる。

しかし、宗一郎の胸には今まで感じたことのない、焼けるような痛みが宿った。

天子——これもお前と一緒にいたせいなのか……？

気持ちよさそうに寝息をたてる天子を見て、宗一郎は瞼を下ろした。

陸 『おまえと出会って』（後書き）

傍らに眠る神様は、何も知らない。

自身が夢の中を彷徨っているときに、心を痛める少年の存在を。

二人の間に聳え立つ、暗黙の了解。それは人間と神様という、途方もない壁だった――

次回『ハハハ、ハハ』前編
どうぞ、ご期待あれ。

漆 『八八八、八八』 前編

「そんなにムスツとしないでくれよ。そんなんじゃ、本当に悪い気が迷い込んでしまふよ」

「うつさいよ」

週があけて月曜日となった。

少し早めの時間に家を出たため、大通りを歩く人の数が少ないように宗一郎は感じた。

しかし、それよりも気になっているのは、今朝の天子とのやりとりだった。

・・・

朝のニュース番組『おはようどうでしょう』。番組のコーナーの一つである星座占いで今日の宗一郎の運勢は最下位だった。

「へえ、中々面白いね、占いつて」

そこに食いついてきたのが、天子だ。

「ちよつと僕も、占いつてヤツをやってみようかな」

その後、テレビに向かつて差し出した天子の手から眩い光が放たれ、目を開けてみると、居間のテレビは忽然と姿を消していた。

天子いわく、今日一日のテレビの存在を明日に送ってしまったとか。

つまり天子は「今日運勢が悪いのなら、その存在と結果を明日に送ってしまえばいい」と思ったらしい。

テレビを飛ばしても今日の運勢は変わらないわけで、出来れば占い師かテレビ局を明日に送ってほしかった。もつとも、それが本当に行われていたら、大惨事ではあるが。

・・・

登校を急ぐ宗一郎の手のひらの上で、携帯電話に腰かけ小悪魔のように笑う天子を見て、宗一郎はふと、昨日の疑問を口にするに
した。

「なあ、天子」

「なんだい？」

「その、本来宿るべき場所——神具に宿る方法が解つたら、どうするんだ」

それを口にしないことは、いつのまにか二人の間では暗黙のルールとなっていた。

初めこそ間違つて宿つてしまい、動揺していた天子だが、今では神具に返ろうとしている様子が全く見られない。

でも、彼女は神様だ。個人の感情を優先することよりも、信仰を集め、人々を平等に守らなければならないという責務がある。

本心と責務。

きっとその二つが、天子の小さな身体の中でせめぎあっているのだろう。

しかし、このまま有耶無耶にしてズルズルと月日を重ねるのは、宗一郎にとつては辛かった。

朝、目覚めたら唐突に天子がいなくなっていた、なんてことはごめんだった。

かといって、天子が本来宿るべき刀へ宿るといふのなら、それは神の義務であり、彼女の意味でもある。

一介の人間である宗一郎に、彼女を引き止めることなどできない。だから宗一郎は、天子の本当の気持ちを知りたかった。

「僕は——、僕は神様だ」

その言葉を聞いた瞬間、宗一郎の身体は石のように重く、硬くなつてしまった。

期待していた何かが、どうしようもないものだと知ってしまった。邪魔だなあ。そんな眼を向けられながら、両脇を人がすり抜けて

いく。

川の流れを塞ぐ岩のように、彼は動かない。

宗一郎の頭の中は言い知れない不安、恐怖が暴れまわっていた。そうだ、彼女は神様なのだ。

人間が神様を愛する？ 人間風情が？

おこがましいな。

熱を持っていた宗一郎の胸が、徐々に冷めていく。

それとは対照的に、着物の袖をもじもじとさせて、上目遣いで宗一郎を見上げる天子。

「でも、でもね。僕は、キミのことが……」

一生懸命伝えようとして口を開くが、それでも、言葉を選んでいくような顔だった。

そんな天子の双眸の奥に隠れた、黒い瞳孔が動き出した。可愛らしい表情に、刀のような鋭さが混じる。

「うわ……何あれ」「落ちるぞおー!!」

周りを歩く数人が、ビルの建設現場の上に向かい叫んでいた――

漆 『ハハハ、ハハ』 前編（後書き）

神様と人間。

交わることのない二つの存在が胸襟を開いたとき、彼らの上から
降り注ぐ一つの答え――

次回『ハハハ、ハハ』 中編
どうぞ、ご期待あれ。

捌 『八八八、八八』 中編

ふおん。

空を見上げると、自分の何十倍もの大きさをした鉄骨が、宗一郎に向かって一直線に落ちてくる。

「逃げて！」

天子の声で我に返ると、鉄骨は宗一郎の目前まで迫っていた。

動けない。あまりの現実離れした出来事に、宗一郎の足は動かなかった。

「間に合え——！！」

天子は空へと両手をかざした。

一瞬にして周囲が灰色へと塗り変わる。

鉄骨と共に落ちてくる砂埃が停止ボタンを押したかのように静止する。

動くものの全ては景色に縫い付けられた。

だが、鉄骨は落下をやめない。

天子は眉をひそめると、何かの印を描いた。

宗一郎の頭上に、水のような波紋が広がっていく。バリア、というやつだろうか。

「ふ——ぐうううっ——！！」

鉄骨と波紋とが衝突する。広がる波紋が揺らぎ、耳をつんざくような破碎音が響き、足元のアスファルトはひび割れていく。

「はは…… やってくれるなあ。えらい神もいたもんだね」

天子を見やると、少し辛そうに、口元を歪めていた。

「神……？」

「キミ、まさかとは思うけど…… このお守りを買った神社で、何か罰当たりなことしたかい？ 例えば——鳥居に小水をかけたとか」

「バ、バカ！ そんなことするわけないだろ。ただ、お御籤を引いたら大凶が出て、カツとなって捨てた……」

「ハハ、神の有難いお告げを捨てるなんて——でもさ、流石にこれは少しやり過ぎなんじゃないかなあ——！」

ググ、と少しだけ鉄骨が押し戻されていく。それに連れて、天子は口調を荒げた。

「いいかい？ 人間がお告げを捨てたからってさ、神だって、やっていいことと、やっちゃいけないことがあるのさ！ でもね、人間も悪いんだよ」

チラリと宗一郎を見やる。

「人間はさ、大して信仰もしないくせに、いざとなったら神頼みするんだ。ひどいと思わないかい？」

天子の言葉を聞いて、宗一郎は何も言えなかった。

なんで守ってくれないんだ、神様の嘔吐き。

そうやって悪いことにあたると、いつも神様のせいにしてきた。

そのくせ、自分ではどうにもならないことが起きると、決まって神様に救いを求める。

まさに、宗一郎自身ではないか。

「でも、僕は人間が好きだ！ 例え罰当たりな行為を犯したとしても、無慈悲に殺そうとする神なんて、僕はなりたくもない——！」

天子はまっすぐな瞳で、鉄骨へと訴えかけている。

もしかしたら彼女は、自分が罰当たりをした天ヶ先神社の神様と話しているのか。

宗一郎は天子が睨んでいる方へと視線を向ける。

もしあそこに神様がいるとするならば、自分の声も聞こえるかも知れない——

捌 『ハハハ、ハハ』 中編（後書き）

宗一郎は、自らの行いで天罰を招いてしまった。しかし、傍らで叫ぶ神は、天罰に抗おうとする。神と神がぶつかり合うとき、無力な人間の宗一郎にできることは、ただ一つだった――

次回『ハハハ、ハハ』 後編
どうぞ、ご期待あれ。

玖 『八八八、八八』 後編

「あ、あのさ！」

激しくぶつかり合う鉄骨と波紋の轟音で、宗一郎の声は今にも掻き消えそうだった。

それでも、宗一郎は腹に力を入れる。

「俺、誤解してた！ 神様って、いつも気まぐれにしか助けられないと思ってた、肝心なときに守ってくれない意地悪なヤツだと思ってた」

「キミ……」

「でも、今は違う。天子と出会ってから、こんな神様もいるんだって、気づいたんだ。その、本当に——申し訳ございませんでしたあ！——」

なんで鉄骨に頭を下げているのか、自分にもよく解らなかった。でも、自分が悪いと思ったら謝るべきだと、そのとき宗一郎は思った。

ぐぐ。

ぶつかり合う音が唐突に消え、鉄骨がコマ送りのように、ゆつくりと宗一郎の脇をすり抜けて、地上に落ちた。

「ふふ、やった……ね」

言い終えて、携帯電話の上に倒れる天子。

それは重さを感じさせない動きだった。

同時に周りは色を取り戻していく。

時間が動き出したことにより、土煙が上がり、破壊されたアスファルトの破片が飛ぶ。

宗一郎の頬や手足に少しばかり痛みが走るが、そんなことは気にもならなかった。

「天子——？」

「八八……神を説得した気分はどうだい？ いやあ——凄かったね

え。あの顔、見たかい？ いや、キミにはあの神自体、見えなかったか」

空を見上げて、思い出したように笑う。

「こんな神、か。ひどいなあ、僕はそんなに変な神だったかい」

そうだ。こいつは変な神様だ。

急に人のお守りに宿って来たかと思ったら、携帯電話を壊しやがって。

しかも勝手に居候いこうになったと思ったら、自分の家のようにくつろいで、お腹が減ったからポテトチップスが食べたいとか、イチゴ・オレを飲みたいとか、あげくの果てにはテレビが見たいとかわがままばかり言い始めて……今朝なんてテレビそのものを消してしまっただ。

「キミ、ちよつといいかい？」

弱々しい声が、宗一郎を我に返す。

「僕の身体を、携帯電話から離してもらえる、かな」

水を掬すくい上げるように、倒れている天子を両手で包み込む。

お守りから離れても、以前のように火花が散ることは無かった。

「やっぱりね……もう、制約は解かれたか。ということは——あら」

僅かに、天子の身体が色を失ってゆく。天子の身体が透け始めた。それに気づいた天子は、自分の手のひらを見つめて肩をすくめる。「どうやら、加護の力を使いすぎたようだね……自分の身体まで維持できないみたい。いやあ、笑っちゃうなあ」

まるで他人事のように笑う。右腕を顔に乗せて両目を隠すと、ふうと一息吐く。

「死んじゃうのかな——」

その言葉に、宗一郎の胸が熱くなる。

天子が死ぬ？

天子がいなくなる？

それは、天子が宿るべき場所に宿る、ということよりも、遥かに

辛いことだった。

死ぬということは、もう二度と会えないということなのだ。

「嘘だろ？」

「さあ——解らない。死ぬとか死なないとか、考えたことなかったよ」

神様が死ぬ、なんて考えられるわけもない。

「まあ……ほら、いろいろ楽しかったよ？ 僕はキミと出会えてよかった。だから僕は悲しくないよ」

宗一郎は、それに聞き覚えがあった。昨日見ていたドラマの最終回にあった、友人が主人公の前で別れを告げるときのセリフだった。

「じゃあ、何でそんな悲しそうな顔をするんだよ」

「おや、本当かい……やだなあ、女の子の泣き顔なんて見るもんじやないよ」

隠していた手が完全に消えていて、天子の顔が露になっていた。

顔は涙でぐしゃぐしゃになっており、瞳は赤く腫れている。

「しかし、キミも酷い顔だなあ。ハハハ」

きつと、凄い顔をしているんだと思う。天子につられて、宗一郎も笑った。

「ハハハハハ」

「ハハハ、ハハ」

笑ううちに、天子の身体はどんどん薄くなっていった。

「ハハハ、ハハ」

そして、宗一郎の笑い声だけが土煙つちけむりの中で木霊していた。

玖 『ハハハ、ハハ』 後編（後書き）

自らの過ちに気づき、頭を下げる宗一郎。

神の怒りは静まるが、守りたかった存在は手の中から消え失せていく。彼女の生きた証し「お守り」を握りしめ、彼はまた一人の夜を送る――

次回『悲しみの一夜』
どうぞ、ご期待あれ。

拾 『哀しみの一夜』

コッチ、コッチ。

その夜、宗一郎はベッドの上で布団を被って丸くなっていた。時計をぼんやりと見つめているが、一秒一秒がとてつもなく早く感じる。

もっと遅くなれ。もっと、考えさせてくれ。

コッチ、コッチ。

秒針は情け容赦なく、規則的に時を刻んでゆく。

天子、天子、天子。頭の中は天子でいっぱいだった。

自分は本当に天子が好きだったんだと、宗一郎は確信する。

我ながら、気づくのが遅かった。

最初はただ気の毒で、捨てられた子犬のようで可愛かったから、とりあえず面倒を見ていた。神様のくせに好奇心こうきしんの塊かたまりで、あれはなに、これはなに、とうるさかった。

そのうるさいヤツはいなくなり、今はとても静かだ。

また、ぽっかりと心に穴が開いたように感じる。

再び、大切な友人を失った。

でも、この気持ちは友人を失くしたときよりも悲しい。

「なんで俺なんか助けたんだ。バカ野郎。こんなバカで友達もいない、どうしようもない俺を助けて死にやがって」

会いたい。

「俺を一人ぼっちにさせやがって——」

また、天子に会いたい。

拾 『哀しみの一夜』（後書き）

慟哭の夜を過ごした宗一郎。

携帯の上で寝息を立てていた、小さな神様はもういない。

昨日までの日は夢か現か、失意の彼を迎えたのは朝の陽射しだった――

次回、最終回『ばわああつぷ』

どうぞ、ご期待あれ。

終 『ばわああつぷ』

宗一郎は、瞼を涙でいっぱいにして朝を迎えた。

寝ている間も泣いていたようで、枕を涙で濡らすという言葉を地で行くような惨状だった。

どうやら、珍しく目覚まし時計の時刻よりも早めに起きてしまったらしい。

あの日と同じように。

チラリ、と脇に置かれた携帯電話を見やる。

あの日、スヤスヤと寝ていた天子。

いつも起きたら、気持ちよさそうに寝ていた天子。

今は、携帯電話の上には誰もいない。

「バカ——」

また、今日から独りだ。

そうだ。友人と喧嘩^{けんか}別れをしてからずっと独りだったじゃないか。それにこれは、元々ただのお守りだったんだ。

宗一郎は自分自身に言い聞かせた。

そう、ただのお守りだったじゃない——か。

しかし、お守りを見るだけで心臓を鷲掴^{わしつか}みにされたような苦しみが湧き上がってくる。

宗一郎は携帯電話を手に取ると、お守りを外した。

「俺は、お前のことが、好きだった。今さらだけど、ごめんな。恥ずかしくて……ずっと言えなかった」

今は寂しい独り言だ。

宗一郎はお守りをベッドに置くと、扉のノブに手をかける。

「ハ、ハハ」

少し、あきれた様な声が背中に投げかけられる。

「いやあ全く——キミは齒の浮くようなセリフをよく言えたものだね。見ておくれよ……ホラ、僕の顔が真っ赤じゃないか」

ゆつくりと、宗一郎は振り返る。

流れるようなピンク色の長髪に、亜麻色の瞳。

そして携帯電話より一回り大きい背丈せたいけになっていた。

それがお守りの上で、照れくさそうに頭を掻いていた。

宗一郎は、それが天子だとすぐに解った。

「天子——？」

「また、会えたね……ソウイチロウ」

照れくさそうに、頬を掻く天子。

「なんで……」

「ソウイチロウが、僕のことを信仰——想っていてくれたからさ」

天子は、ゆつくりと語り始めた。

信仰は神を想う心ということ、加護かこの力は信仰心しんこうしんから生まれること。

広く知られた神ならば、自然と信仰心は高められ、加護の力は強大となる。

しかし、生まれたばかりの天子を知っている人間は宗一郎しかいなかった。だから、加護の力はとても弱いものであり、鉄骨が落ちてきたときに、加護の力を使い果たしてしまったという。

しかし、天子が消えてからも、信仰心は途絶とだえることはなかった。むしろ、強まったという。

「暗闇の中で、ずっとキミの心を感じたよ。その、好きだとか、会いたい、とか」

宗一郎の顔が沸騰ふっとうしたやかんののように、熱を帯びる。

天子は続けた。

「それでね、その信仰心のおかげで僕の神階を上げてもらえることになったんだ。だから僕が持つ加護の力は、より強いものとなってまたココに戻ってこれたんだ」

お守りからふわり、と浮かび上がり、宗一郎の目の前に近づく。

それは息がかかるような距離だった。

「それに、もうお守りの制約は受けないんだ。だから、お守りから

離れてもよくなったんだ」

じゃあ——もう、ここにいらなくてもいいんだな。

そんな言葉が出そうになる。

その前に、天子は少し照れくさそうに、宗一郎に告げた。

「でも……今度は、キミに宿っちゃったみたい——なんだ」

時が止まったように感じた。

「天子が、俺に？」

思わず聞き返してしまう。

恥ずかしそうに、天子は頷く。

「ソウイチロウの心がね、空っぽになってたんだ。このままじゃ、ソウイチロウは人間としては生きていけなくなりそうだった」

「だから……？」

「うん。ただし、今度はソウイチロウから離れられなくなっちゃったけど……あ、違うんだ！ これは決してその、離れたくないっていう訳じゃないんだよ。離れ、られないんだからね」

いやだなあ、もう……。手をパタパタと振り、火照る身体を冷やそうとする天子。

「じゃあ、さ。これから——ずっと、一緒にいられるのか？」

「当然じゃないか。もう、ずっと一緒なんだよ。離れられ——ないんだからね」

てへへ、えへへ。

天子と宗一郎は互いの顔を見合わせ、笑った。

天子を見つめて、宗一郎は確信した。

自分にはこいつがいないと駄目なんだ。

と、天子の後ろにある時計が視界に入る。そして宗一郎の顔がみるみる青ざめていく。

目覚まし時計のアラームがセットされていなかったようで、短針は既に八時を指していた。遅刻は確実である。

「うわ、やばい遅刻する！ ていうか遅刻確定だよ！！」

「なんだって。それはまずい……ソウイチロウ、足を出してくれ。」

隼^{はやぶさ}よりも速くなるように、僕のぱわああつぷした加護の力をかけてあげるよ」

「やめろ！ 俺の脚だけが先に学校へ着いてそうだから——おわ、テレビが二台ある！？ 昨日の占いで、今日へ送られたテレビか！

邪魔くさい！！」

勢い良く家を飛び出していく宗一郎。

こんなに騒がしく登校するのは、初めてだ。

天子に出会う前は、本当に何もかもが冷めていた。

何も感じずに、全てがどうでもいいと思っていた。

だが、今は少し違うような気がした。

心に暖かいものを感じる。

これは、自分の胸に宿る、天子の温もりなのだろうか。

宗一郎は、駅へと駆けていく。

天子と、共に。

終 『ばわああつぷ』（後書き）

天子と宗一郎。二人の笑いあう未来を書き終えた、作り手『虎太郎』。

「漫画のネームとゲームシナリオと、投稿用のスケジュールがかつかつた……息抜きがしたい」

彼が思いついたのは、既に書き終えた『おまもりやどり』のあとがきを書くことだった――

次回『あとがき』

どうぞ、ご期待――しなくてもいいです。

余 『あとがき』

この度は『おまもりやどり』をご愛読していただき、ありがとうございます。
御座います。

小さな神様が起こしたお話、如何でしたでしょうか？

読んでいただいたみなさまが、ほっこりと和み、本作を読んだことで、まだまだ明るい未来があるのだ、と知ってもらうために作りました。

人生で初めて、読者を意識して書いた作品です。

・作られた経緯

この作品は『15000文字程度』という決まりの中で作られたものです。

展開等、ライトノベルとしてはかつてないほどの短さで、うまく纏める必要があり、大変苦労した覚えがあります。

しかし、天子の魅力もあってか、無事に優秀作品の枠に入ることが出来ました。

下手な小細工はなしにして、愚直なほどの、王道的な展開。それが好評でした。

・天子

この国、日本に生まれながらにして、古より我が国を守ってくださっている、神様たち。

聞けば堅苦しいですが、そんな神様たちをポップに、より親しみやすくしたいと思いながら書いた結果、可愛らしい神様が生まれましました。

今にして思えば、親しみやすいというか、危なっかしくて目が離せないというか……。

・何故、天子がピンク色の髪になったのか

本作を書き終えた後、私はY先生に誤字脱字などを見てもらいました。

すると「そういえばさ。虎太郎君さ、天子は『ばわあっぷ』しただけ、外観的には何も変わらないの?」と言われました。「うーんとですね」と返答に困っている

「髪の色変えたら?」と言われ、「なるほど。じゃあ、そうしてみます」と、私も作りこみの甘さを実感しました。

そのため、『身長がちょっぴり大きくなった』のと『髪の色が変化した』という変化をつけました。

ですが、他の先輩達に見せた中で「生まれ変わって髪がピンクになる理由が解りません。これ、必要ですか?」

と指摘されました。「まあ、遊び要素として……ばわあっぷし」という証明として……」なんて濁しとききました。

すると、そのやり取りを聞いていたY先生が「そうだね。何で、髪をピンクにしたの?」と口を挟まれました。

「せんせーが言ったんでしょ! 『ばわあっぷ』したことを解りやすくするために、髪の色変えたら、とか!」

という、コントみたいなやりとりで生まれたものでした。

でも意外と、ピンクに巫女服って合うんですよ……?」

・似てるアニメ

この作品を書いた後に「夏目友人帳を見たか？」と友人に言われました。聞けば、おまもりやどりと設定が似ているなどで「いつかい見てみる！」と急かされます。詳しく聞いてみた感じだと、私のほうが異端というか、神様らしくないというか……。機会があれば、見てみたいと思っています。

・タグの「おっさんが三人泣いた」の真相

このサイトに掲載する前に、数十人の人に見てもらいましたが、中でも極めつけは四十を越えた三人のおじさんから「ほろりときた」「王道すぎて泣いた」と言われたことです。なんてコメントすればいいのか、困りました。

泣いたというのも、おっさんからすれば、ライトノベルを見たことが無いので、その反動もあつてのことなのでしょう。

・今後について

本編はこれで終わりとなります。

あとがきを掲載した翌日より、執筆済みの番外編『ヘップバーン』及び『できること、できないこと』を掲載していきます。

予約掲載となるため、毎日十八時ぴったりに、更新します。

引き続き、天子と宗一郎の物語をお楽しみください。

『おまもりやどり』本編を連載している間、たくさんの感想をいただき、本当にありがとう御座いました。一人一人の声を目にすることができ、また返信することが、いつの間にか私の生活のうちの一

つとなっていました。

こういうことが、作家になるにあたり大切なのだな、と感じました。

そのほかにも感想、レビューなどいただけると、今後の執筆の励みになります。

お気軽にお送り下さいませ、お待ちしております。

それでは、失礼します。

虎太郎でした。

（「・ω・」ガオー

ヘッバーン？

八月も中盤に差し掛かり、外ではセミが近所迷惑級の騒音を発していた。

夜の街に現れる暴走族よりも、今はセミを検挙して欲しい、と宗一郎は考えていた。

そして、部屋の中ではふわふわと視界のあちらこちらで、何かが浮いていた。

と、整頓された本棚の横を、半透明の猫の生首が横切る。

生首の根元はこのぼりのしっぱのように、ひらひらと青白い尾を引いていた。

机の上では猫じゃらしのようなものが、終始のた打ち回っていた。おそらく犬のしっぱだろうと、宗一郎は冷静に考える。

その他もろもろ、似たり寄ったりのもが無音で、宗一郎の部屋を縦横無尽に泳いでいるのだ。

生首だけの猫が大きなあくびをする。

またあいつの仕業か。

そのまま猫を目で追うと、空中に浮いているちいさな女の子がいた。

ピンク色の長髪に巫女装束。身長は十センチといったところか。

宙吊りの状態で、手足は水の上に浮く水死体のように力なく垂れ下がっている。

ずんずんと宙吊りの巫女服へ近づく。

「おいこら天子」

むんず、と着物の襟を掴むと小刻みに揺さぶった。

んあんあと悲鳴を漏らして、それ——天子は目を覚ます。

「やあ……ごきげんようソウイチロウ。朝っぱらからどうしたんだい」

瞼を擦り、天子はなんとか起床した。

「ごきげんよう天子……で、一体あれは何だ」

気持ち良さそうに遊泳している生首を指さす。

「猫だねえ」

「確かに——見まごう事なき猫の首だ。じゃあ、あれはなんだ」
机の上の、活きのいいしっぽに指を向ける。

「犬だねえ」

「確かに——どこからどう見ても犬のしっぽだ。しかし、だ」
たつぷりと間を空けてから、天子に問い詰める。

「こいつらは一体何なんだ」

ううんと唸り、天子は小さな口で大あくびをする。

「起きてすぐに質問かい……？　ちょっと一息つかせてくれないかな」

ヘップバーン？（後書き）

小さな神様が戻ってきて、数週間。

全ての出来事がいい思い出となるという矢先、宗一郎を日常を脅かしたのは謎の浮遊体たちだった。

しかたなく、宗一郎は問うことにした。

浮遊体と一緒にあって、部屋をただよう神様の天子に――

次回『ヘップバーン？』

どうぞ、ご期待あれっ。

ヘッバーン？

「ああー、生き返るうー」

ままごと用の湯のみをぐいっと傾け、心底美味そうにお茶を飲む天子。

「そうか、それは良かった。とりあえず本題に入るが、この空を泳いでるのは一体何なんだ？」

二人の頭上を行きかう生首と、その他諸々。

天子は部屋を見回して数秒、眉間に皺を寄せ「あー」とつぶやく。「あれはね、幽霊だよ」

はい説明終わり、と言わんばかりに言葉を切り、お茶を啜る。ズズズ。

数秒間、その音が部屋の中を支配した。

「あー、そっか」

「うん、そう」

ズズズ。

「って、何のん気にお茶啜ってるんだ！ 幽霊だぞ幽霊！？」

「あ、いや。ほとんどが動物霊だし、特に害はないよ」

猫の生首を見やると、動かなくなったしっぽに近づいて行き鼻を近づけると、見計らったかのようなタイミングでしっぽが跳ねる。

鳩が豆鉄砲を食らったような顔をして、生首は明後日の方向へ飛んでいった。

「あんなの見てたら、俺の気分が害されるんだが」

学校から帰ってきて、しっぽが机の上で跳ね回っている。

電気を消して布団に入り、暗闇の中を生首が彷徨っている。

目を覚ますと、幽霊たちが我がもの顔でたゆたっている。

嫌だ。そんな部屋は嫌だ。絶対に落ち着かない。

宗一郎はがっくりと肩を落とした。

「元々ねー、僕がソウイチロウと出会ったときからいたんだよね、あの子たち。でもソウイチロウは気にしてなかったし、そのまま放置してたんだ」

「いたのか……」

「僕がソウイチロウに宿ったから、見えるようになったんじゃないかな。ま、見えて悪いことはないからさ」

と、天子は再び元気になったしつばを指さす。

「あれが毘沙門天びしゃもんてんでねー、さっきの生音が無頼ぶらいじん迅」

「名前付けてたのか！」

「で、あそこにいるのがミズ・ヘップバーン」

天子が示す方を見ると、そこには一つの火の玉が浮いていた。

一目見ただけで百人中百人が人魂ひとたまと言うであろう、典型的な形の火の玉だった――

ヘップバーン？（後書き）

部屋をたゆたうものは動物霊である、と告げられた宗一郎。

神様の言うことだからと信じる最中、一際おかしい霊を見つける。

ろうそくに灯る炎のように、その身を狂おしくよじらせる。

その名はヘップバーン。

かの有名な女優の名前だった――

次回『ヘップバーン？』

どうぞ、ご期待あれっ。

ヘップバーン？

手のひら程の青白い炎が、空中でメラメラと燃えている。

「ヘップバーン——外人か！？」

「だって、そう言ってるんだもん」

「あの火の玉がか！」

「うん。ねー、ヘップバーン」

気のせいかな、頷いたように炎が揺らめく。

「言葉、通じるのか？」

「うん。死んだ人の声は魂から発せられるんだ。それを『死者の聲』
こゑ といってね、僕たちは意思の疎通^{そつう}という形で話せるんだよ」

一体どこからきたのか、なんの目的があつて俺の部屋に来たのか。
宗一郎はくらのげの様に泳ぐ火の玉を凝視する。

「へー、若いころはオードリー・ヘップバーン^{ヘップバーン}って人に似てたんだ
あ？ …… え、やだなあもう」

天子は宗一郎そつちのけで火の玉と話していた。

どうやら天子は幽霊と話ができるらしい——おそらく、神様だから
だろう。もしかしたら、自分には火の玉でも、天子には生前の姿
が見えているのかもしれないなあ、など考える。

「ふんふん。セミ？ へー…… あ、いいね！ その作戦でおやつで
も食べようか」

一体、なんの話だ？

天子は、ちらちらと宗一郎を見て、笑いをこらえている様子。
なんだよ。

そう言つと、くつくと悪役が秘密道具を出すかのように、天子は
怪しく笑った。

「あのさ、ソウイチロウって苦手なんですよ。セミが」

「え…… あ——」

瞬間、身体を巡る血が逆流したかのように、ゾゾゾと戦慄^{せんりつ}が走っ

た。

何で知っているんだ。そもそも、知ってどうする気だ。
不安が背中を這い回り、全身がむず痒くなる。

「なんで、それ、を」

「まあいいじゃないか。それよりも——僕は起きたばかりで、お腹がすいたなあ」

空中に浮く天子は、宗一郎を見下ろしながら言った。

「あまいもの、たべたいなあ」

獲物を前に舌なめずりする快樂殺人者の如く、ゆっくりと宣告する。

「『うまや』のしゅうくりいむ、ほしいなあ」

うま屋のシュークリーム。それは頬が落ちるほど美味い。舌に絡みつく濃厚な風味のカスタードクリームは上品な甘さで、一度でも口にしたら誰だってとりこになってしまう一品。宗一郎の好物でもあった。

以前、犬のようにおねだりする——ワンワンと吼えるように、欲しい欲しいとわめいた——天子に一口食べさせてあげたことがあった。

「もちろん、へっふばーんのぶんもね」

じゃないと——ソウイチロウが寝てるとき、布団の中にセミを入れちゃうよ。

幻聴が聞こえたような気がした。

見えない力に背中を押され、宗一郎はすぐに家を飛び出したのだ。
った。

ヘップバーン？（後書き）

生前の姿が、かの女優に似ているからと自称する人魂『ヘップバーン』。

天子のいたずらも重なり、断腸の思いで、貢物の買いだしに遣わされてしまった。

宗一郎の財布事情や如何に――

次回『ヘップバーン？』

どうぞ、ご期待あれっ。

ヘッバーン？

「おいしいねええ」

もつきゅもつきゅ。

まるでこの世の全てを手に入れたかのような笑顔で、天子はシュークリームをほお張っていた。

背丈の関係上、天子より一回り小さなシュークリームだが、食べる姿はチーズをかじるネズミのようだった。口の周りいっぱいについたカスタードクリームをなめ取る姿は、実に愛らしい光景である。しかし今の宗一郎には、それが憎らしくてしょうがない。

親の仕送りに頼るしかない貧乏学生 of 宗一郎。

財布の中には七百円しかなかった。ちなみに、うま屋のシュークリームは三百円。仕送りは月末であり、社会人であるうと学生であるうと、収入が入る前は金欠ぎみになっているわけで。

二つ買ったら百円しか残らない。

勇気あるファツ。ン・コメディアン、ジョーカー神様め……！

今に見ている。じつくり可愛がつてやる——その笑顔を奪って、泣いたり笑ったり出来なくしてやる！！

なけなしの金をカツアゲされた拳句、手足を縛られ、大好物のシュークリームを鼻先にぶら下げられた気分だ。

宗一郎の心の中は、魔女が煮立てる釜の中身のような感情がふつふつと沸いていた。

俗にいう、怒りというものである。

そんな宗一郎を尻目に、会話が盛り上がる天子と火の玉。

何とも言えない疎外感から、煮えていた怒りも徐々に冷めていく。こうなるといじけた子供のように、ベッドに寝転がって一人漫画を読み始めるだった——

ヘップバーン？（後書き）

ついに不貞寝同然に、宗一郎は暴君天子にそっぽを向いてしまう。
だがしかし、無邪気に微笑む天子を見ると、未だ知らない一面を
垣間見たと、胸が脈打つ。

そんな宗一郎を尻目に、天子と人魂の会話は盛り上がっていくの
だった――

次回『ヘップバーン？』
どうぞ、ご期待あれっ。

ヘップバーン？

「え……やだなあ、もう——ヘップバーンたらあ！ そんなことないよう」

しかし不思議だな、と宗一郎は思う。

自分以外に話し相手がいなかった天子が、今は他人……火の玉と楽しそうに喋っている。こうして考えると、それはそれで喜ばしいことであつた。

「うん、うん……え、もう行っちゃうの？ あーそつか……うん、わかつた——ソウイチロウ、ヘップバーン帰っちゃうんだって」

天子は向き直り、宗一郎に告げた。

その顔は「まだ遊びたい」と言いたげな小学生のようだった。

ゆつくりと浮き上がり、窓を通り抜けて火の玉は去っていった。

皿に載つたままのシュークリームを残して。

「あれ、ヘップバーン食べなかつたのか？」

「うん。幽霊つていうのはね、食べ物や飲み物を直接口には出来ないんだ。だから、湯気や冷氣、匂いを食べて満腹になるんだよ」

ふーん、と関心していると、天子は宗一郎を見上げ微笑んだ。

「だからさ、残ってるこれはソウイチロウの分。好きなんですよ、シュークリーム」

先程の憎しみも怒りも、その笑顔で消し飛んでしまった。

「ああ……その、ありがとな」

気恥ずかしくなり、宗一郎はそそくさとシュークリームを口に運ぶ。

一口、シュークリームのカスタードが舌の上を転がり——そこで違和感を感じた。

「天子。あのさ、これ味無いんだけど」

「どうやら味の気も食べちゃったみたい」

まさに味気が無い、とはこのことだ。

このままでは生殺しではないか。

明日は親からの振り込みがあるため、銀行に寄ってから買いなおしてこようかな、と思った宗一郎は、自分と天子以外に、もう一人シュークリームが好きな人のことを思い出した。

ヘップバーン？（後書き）

自腹をきったシュークリームを口に入れたものの、無味という痛い思いをしてしまった宗一郎。

天子の無邪気なダジャレも意に介さず、宗一郎はただ、胃に流し込んだ。

そして、今度こそ美味であるシュークリームを食すべく、買い物へ出かける。

自分と天子と、大切な人のために――

次回、最終話『ヘップバーン？』

どうぞ、ご期待あれっ。

ヘップバーン？

翌日。

もつきゅもつきゅ。

「おいしいねえ〜」

二日連続でシュークリームをほお張る天子は、幸せに浸^{ひた}っていた。少し離れた場所で宗一郎は、小さな仏壇^{ぶつだん}を開いた。

そこに買ったばかりのシュークリームを皿に載せて置き、線香^{せんこう}を立てる。

「ソウイチロウ、その仏壇どうしたのさ」

「いやな、こっちの学校に来るときの引越してゴタゴタしちゃっててさ。両親は海外で外交官してて家にいないしさ、俺があげなくちや可哀相じゃん」

手のひらを合わせて、心を真っ白にする。静かに冥福^{めいふく}を祈る。

「天子、ひとつ手を合わせてやってくれないか。神様に祈ってもらうんだ、きつと喜ぶさ」

「うん。それでは早速——」

と、仏壇の写真を見て、ぱあっと天子は笑顔を咲かせた。

「どうした？」

「ヘップバーンだ！」

仏壇には、老人とは思えない元気いっぱいに笑う祖母がそこにあった。

今日は八月も中頃^{なかごろ}、お盆の時期である。

ヘップバーン？（後書き）

ようやく番外編も終え、一息ついた虎太郎。

「ふう……色々あったけど、楽しかったな。やっぱ、小説を書いて良かった」

あふれ出す感情の噴流は留まるところを知らず、ついには、再び『あること』を思い立ってしまう。

「もう一度、感想書いて、息抜きしたいなあ」

作者気取りの虎太郎は、再びあとかきの作成に取り掛かった。誰も期待していない、どうでもいい長文の執筆に――

次回『あとかき』

どうぞ、哀れんでくださいませっ。

『あとがき』

『おまもりやどり』の番外編である『ヘップバーン』を最後まで読んでいただき、ありがとうございました。

この物語は、天子がぱわああつぷしてから数週間後のお話です。え、季節は八月だったのか、ですか？

個人的には七月中盤あたりが本編のラストだったと考えています（え）

本編と違い、文字制限がなかったために、こうして余計な描写が出てきて、読者様を混乱させる結果となってしまったことに関して、本当に申し訳なく思っています。

ただ、一つ解ったことは——文字制限のしほりがあっても、なくとも、作品を書く楽しさは何も変わりませんでした。

・天子と仏壇

まだ神道に詳しくなかった頃に書いたので、仏教と神道が入り混じったお話となっていました。神道の神様と仏壇のコラボレーション……異質すぎて、逆に斬新に思えてきました。

ちなみに、お盆は仏教のイメージが強いですが、もとは神道の考えだとされています。

神道は祖霊信仰それいや御霊信仰みたまが基盤であり、古神道と仏教の盂蘭盆うつぼんが習合したものが、現在のお盆とされているそうです。

ピンク色の髪事件で出てきたY先生は仏教派なので「これさ、仏教じゃん」なんて突っ込まれましたが、上記にあることを述べて、突っ込み返してやりました。

「そうなんだ。僕はさ、大仏が好きただけだから」

そんなこといったら、私だってただの神様好きただけですから…

…。

いまだに、こういつた盆のあやふやな部分が神仏習合の名残なんですよ。

ちよっぴり、悲しいです。

・ヘップバーン

ヘップバーンのモデルは、数年前に亡くなった祖母です。

亡くなる間際、目も当てられないほど苦しそうにしましたが、お葬式場で会ったときには、安らかな顔をしていました。私たち家族はお金が無いので墓を立てていないのが、未だ心残りです。

・祖母のこと

私は、そのころ仕事もしていて大変、精神的に辛い時期にありました。

祖母は亡くなるちよつと前に祖父と離婚し、身よりもありませんでした。

ですので、長女である母が面倒を見るということで、私の家にやってきました。

苦しそうにいつも居間のソファで寝ている反面、いつも祖母がいるということで、家で寛ぐことができずに、イライラしてしまいました。

病院に入院する直前、二人きりになったときに、ソファに横たわる祖母は、私を見上げて「ごめんねえ、虎太郎君。迷惑かけて、ごめんねえ……」と謝ってきました。

それがまた、私の心を見透かしているように、重々承知していることなのに、言葉にされたことでつい……

「そう思ってるなら、とつとといなくなってくれ」

と、言ってしまうました。

そのあとに、申し訳なさそうに謝る祖母の言葉が、今でも耳から離れません。

しばらくして様態が急変し、入院してから数週間後に祖母が亡くなりました。

祖母の遺体を目の前にしたとき、ようやく「もう二度と、祖母に『あのこと』を謝ることはできないんだ」と解りました。

祖母の遺体の前で、何度も何度も、泣きながら謝ったのを覚えています。

もう謝っても、許してもらうことなんて、絶対にないんだなあ実感しました。

葬式が終わってから数カ月後、祖母の地元に住む親戚の下に、たくさん祖母の知り合いが訪れました。

そして、祖母の生前の姿が映っているビデオテープを持ってきて、みんなで見たそうです。

祖母は、とても活発で身体を張って笑いを取る人でした。

年甲斐も無く、レイザーラモンHGの衣装を纏ってものまねしてみたり……たくさんの知り合いが「あの人は、本当に太陽のような人だった」と口々に言っていました。

私は、そんな祖母に酷い言葉を吐いた自分が許せず、そして祖母への、私から出来る最大の手向けとして、この作品を書くことにしました。

私はとんでもないバカなので、できることといえば小説を書くことくらいしか、できませんので。

祖母は、常世でも元気でいるでしょうかね。

早くプロになって、私の名前が常世に届くよう、頑張らないとい

けませんね。

そうすれば、祖母もこの作品に気づいてくれることでしょう。

また、感想、レビューなどいただけると、今後の執筆の励みになります。

お気軽にお送り下さいませ。

お待ちしております。

それでは、しばしのお別れのあと『できること、できないこと』
でお会いしましょう。

虎太郎でした。

（「・ω・」）「ガオー

できること、できないこと？

「イヌが欲しい！」

もし、子供がこんなことを言ったら、大抵の大人は「いけません。うちにはペットを飼う余裕なんてないの」と断るのが普通だろう。

例え、ペットを飼う余裕があったとしても、だ。子供のわがままなど、いちいち耳を傾けていたらキリがないからだ。

そのため、宗一郎そういちろうは「飼う余裕がない」と、子供のようにせがむ小さな神様——天子てんしに告げた。

無理だと解った瞬間、天子は子供同然に暴れ始めた。

腰まで伸びたピンク色の髪は乱れ、赤と白の巫女装束がテーブルの上でのた打ち回る。十センチという小さな身長のせい、ハムスターが転げまわっているようにしか見えなかった。

ひとしきり暴れまわると、天子はボソリと呟いた。

「じゃあ、ネコでいい」

神様であっても生まれただけなので、思考もほぼ子供同然である。

つまるところ、貪欲どんよくなのだ。

「ダメ！」

宗一郎は母親の如く、天子を叱りつける。

「イヌもネコもダメ！ 最大はクマから最小はカメまで……ペットは全っつ部ダメ！」

そもそも宗一郎にとって、天子自体がペットのような存在なのだ。現状でも天子の世話でいっぱいなのである。

できること、できないこと？（後書き）

小さな神様は、人間にせがむ。犬が欲しいと。

無邪気な願いは受け入れられず、ただただ失望の中を彷徨うしかなかった。

翌日、天子は大きな箱を見つける。

自身と同じく、無邪気な目を持った相手が住む、その箱を――

次回『できること、できないこと？』

どうぞ、ご期待あれっ。

できること、できないこと？

——という騒動が昨日のこと。

そして今日。

リビングのテーブルには、申し訳なさそうに正座した天子と、冷たい眼差しでそれを見下ろす宗一郎の姿があった。

「天子……昨日のこと、覚えてるよな」

天子から少し離れたところにある、ダンボールを見やる。

「あゝ、うん。覚えてる」

「そうか」

へっへっへ。

ペタンと垂れ下がった耳、全身を覆いつくすフサフサの体毛。

黒真珠のような瞳を二つ埋め込まれた生き物を指さす。

「これ、なに」

ダンボールの中でしつぽを振るそれを見て、天子は答える。

「……静岡産の三ヶ日^{みっかび}みかん」

「だれがダンボールの字を読めといったんだよ！」

「静岡のみかんはとっても美味しいんだ……」

「じゃあ今度買ってやるから、これ、元の場所に返してきなさい」

「これじゃない。飯綱^{いづな}だもん」

天子に名前を呼ばれ、小さな返事で応える子犬の飯綱。

それは茶色と白が交じった、パンダのような顔が特徴のキャバリ

アだった――

できること、できないこと？（後書き）

石動家に新たにやってきたのは、ダンボールを唯一の住み処とするキャバリア・キングチャールズ、スパニエル。

宗一郎は呆れながらも、天子を説得にかかるのだった――

次回『できること、できないこと？』

どうぞ、ご期待あれっ。

できること、できないこと？

宗一郎は、飯綱が「キャバリア」と呼ばれる小型犬であることを知っていた。

何故なら、昨日天子が見ていた捨て犬を育てるドキュメンタリードラマに出てきたのだ。

そして天子が「イヌが欲しい」と言い出したのも、その番組に影響されたからである。

もつとも、テレビで見たキャバリアとは違い、飯綱は全身ドロだらけなのであるが。

「何が『飯綱』だよ……それじゃイタチじゃないか」

反省する天子の隣で宗一郎は、飯綱にあれこれとやってみる。

お手、おかわり、お座り、伏せ、ゴロン……。

宗一郎の言葉に全く反応しないまま、飯綱はただただ好奇心を含んだ瞳を向けるだけだった。

「ん……天子、三文で飯綱との出会いを説明しろ」

「見つけた。

拾った。

そしたら怒られた」

最後の部分だけは、憎しみが込められていた。

「当たり前だ！」

不満を隠そうとしない天子に、全力で小さなおでこを小突いてやりたくなる宗一郎。

以前にも一度、同じような衝動にかられ、つい小突いてしまったことがあった。

しかし、何時ぞやに鉄骨を防いだバリアの縮小版を出され、宗一郎は向かいの壁に激突して失神したのだった。

そのため、頭で小突こうと考えても身体が拒否反応を示す。

「ま……どちらにしろ、コレ——飯綱は捨てられてたっばいしな」

先ほど、宗一郎は飯綱に色々試してみた。

基本的な「お手」や「お座り」などには何の反応も見せなかった。首輪もなく、飼いだであるとは思えない。

しかし、キャバリアという犬種が捨てられるということは考えにくい。

だが、こうして目の前に飯綱がいるという以上は、認めざるを得ないのだ。

「うん。だから拾ってきたんだ。昨日のテレビでもミヒロは拾ったろう?」

ミヒロとは、昨日のテレビで捨て犬を育てた、ヒロインの名前だった。

「それにさ……似てるんだ、僕とさ」

天子は宙に浮き上がり、飯綱に近寄る。

「どこに行けばいいのか判らない。どうすればいいのか解らない。」

飯綱
この子を見てるとね、初めてソウイチロウとあったときの僕を思い出すんだ」

飯綱が天子を見つめる。瞳はまるで「お母さん」と言い出しそうなくらい、信頼の眼差しを向けていた。

「僕はソウイチロウに助けられた。だから僕も、この子を救っちゃダメかな」

天子が飯綱の頭を撫でてやる。すると、鼻で小突いた後、天子よりも大きな舌がべろりと、小さな身体を舐めた。

「ダメ、かな?」

天子と飯綱に見つめられた宗一郎は、首肯するしかできなかった

できること、できないこと？（後書き）

自身の境遇と子犬を重ねた天子は、同情心からつい持ち帰ってしまつた。

子犬を戻してくるように言い聞かす宗一郎も、天子と飯綱の瞳には叶うことが出来なかった。

しばらくして、石動家からは犬の鳴き声が聞こえるのだった――

次回『できること、できないこと？』
どうぞ、ご期待あれつ。

できること、できないこと？

「コラア！ 何度言わせれば解るんだ！！」

飯綱が来てからというもの、宗一郎が怒る回数が多くなった。

「天子……散歩から帰ったらちゃんと飯綱の足を拭けっつていつも言ってるだろ！」

主に怒られているのは天子であるが。

「ごめんごめん。さあ飯綱、きれいにしようねー」

自分の顔ほどあろう飯綱の手足を、濡れたタオルで器用に拭いていく。

宗一郎は手伝わず、少し離れた場所で見ているだけだった。

飯綱を飼う上で一つ、宗一郎は条件を出した。

それは『飯綱の世話ができるようになること』である。

濡れタオルの用意や餌^{えさ}買出しなどのサポートはするが、実際に飯綱の世話をするのは天子に任せていた。

飯綱を飼い始めて数日。

些細なミスは多々あるが、それでも天子は一人で面倒を見ている。

「ほら飯綱、おいで！」

天子がリビングへと消えていく。わん、と小さな返事をして飯綱が後を着いていく。

それに飯綱は、天子によく懐いていた。

子供同士気が合うのだろうか、天子と飯綱は一日中動き回っている。

リビングを覗くと、ソファアの上でじゃれ合っていた。

小さな神様が笑い声をあげ、子犬がしっぽを振る。

こんな日常が毎日やってくると思うと、宗一郎は胸が妙にむず痒^{がゆ}くなるのだ。

無駄に広い庭付きの一軒家は、犬一匹を飼っても狭さを感じない。天子と飯綱が騒ぐことで、寂しかった家に活気が宿る。

宗一郎は、まだまだ厄介ごとを起こす天子と新しくやってきた飯綱の面倒を見なくてはならない。だから自分が急に父親になったかのように思うときがある。

こんな家族がいても、いいのかもしれない。

「おい、飯の時間だぞ」

「はい！」「ワウ！」

できること、できないこと？（後書き）

河川敷を疾駆する、一匹の子犬とフリスビー。

綿の如き尾をふり、ご主人の元へしたり顔でやってくる小さな狩人。

天子は言う。

「今度は僕が投げさせておくれ」と――

次回『できること、できないこと？』
どうぞ、ご期待あれっ。

できること、できないこと？

数日後。

週末の土曜日は、絵に描いたような雲一つ無い快晴だった。

宗一郎は川に向かい、丸いフリスビーを思い切り投げる。

「そらいけ飯綱」

クラウチングスタートのように身を縮こめていた飯綱が河川敷かせんじきを縦に突っ切っていく。

小さな身体を一生懸命に動かし、見事ジャンピングキャッチを決める。

「すごいねえ……今度は僕にやらせてくれないかい？」

「ああ」

ぴよこぴよこと跳ねるように、飯綱が宗一郎の元へ戻ってくる。

「えらいえらい。ご褒美にしっぽを一本増やしてあげるよ」

「やめんかい」

「えー。しっぽの数だけ、霊力が溜まるのに」

「溜めんでいい。それよか、投げないのか？」

そうだった、と天子はフリスビーを持ち、軽く腕を振る。

暖簾のれんを払うくらいの、軽い動作だった。

シュオン、と風を切ってフリスビーは低空を滑るように飛んでいった。

すかさず飯綱は転身てんしん、滑空かっくうする円盤を追う。

風にそよぐ草を切断しながら、フリスビーは川の手前に落ちた。

数秒遅れて、飯綱がフリスビーの着陸地点にたどり着く。

「危ないなあ……もし人がいたら、足を撥ね飛ばすところだった。気をつけないと」

フリスビーを凶器に変えた本人が、のほほんと言った。

それからしばらくの間、天子は休みなくフリスビーを投げ、飯綱は疲労の色も見せずに何度もフリスビーを啜くわえて戻ってきた。

これは買ってよかったなあ、宗一郎は一人頷いたのだった――

できること、できないこと？（後書き）

小さな姿をしていても、天子の力は神のソレだった。

そんな彼女は自らの力を自覚していないのか、上手く扱えないことをさほど気にする様子はなかった。

日常に、神様が馴染んでいく――

次回『できること、できないこと？』
どうぞ、ご期待あれっ。

できること、できないこと？

始めはボールにしようかと思っていたとき、一緒にいた天子が「これ、なに」と聞いてきたのが、フリスビーだった。

何に使うのか解らずに、まじまじと観察する天子が妙に可愛くて買ってしまったのだが、これは予想外の成果である。

「あちゃー」

フリスビーが常軌^{けいじ}を逸^いした動きを見せて、ズドンと地面に突き刺さる。飯綱が一生懸命抜こうとして苦戦していた。

「しょうがないな……ふ、ぬ——ぬああ!？」

見かねた宗一郎が抜きにかかるが、抜けない。

まるで地面に固定されているかのように、揺さぶってもピタリと直立不動を保っている。

「どれ」

天子がフリスビーを握ると、それはいとも簡単に抜けてしまった。「もう少し——もう少しでコツを掴めと思うんだ」

フリスビーの投げ方を真剣に考える天子。

放っておけばコツを掴むまで、一生投げかねない雰囲気だった。

「そうだな。でも、そろそろ帰らないとな」

「えー」

日は落ちてしまい、あたりはすっかり赤色に染まり始めていた。を膨らまして抗議を示す天子を横目で見て、宗一郎はやれやれと肩を落とした——

できること、できないこと？（後書き）

子犬とじゃれ合う、子供の神様。

しかし、そんな一柱と一匹の大切な時間はすぐに過ぎ去っていく。
あと一回。

その言葉に、天子は妙なフォームを構えるのだった――

次回『できること、できないこと？』
どうぞ、ご期待あれっ。

できること、できないこと？

「じゃあ、あと一回な」

「やったね。じゃあ張り切って——」

プロ野球の投手のように、思い切りオーバースローでそれを放った。

縦回転をしたフリスビーは奇妙な音を立てながら、天子が投げた方向——川とは真逆の住宅街へと飛んでいく。

ワンツ！

あっけに取られる二人を置いて飯綱は駆け出した。

残されたのは、あまりの出来事に言葉がでない宗一郎と、自分の手を見つめながら「難しいなあ」と呟く天子だけだった。

しばらく不自然な飛び方をするフリスビーを眺めていたが、遠くから聞こえる飯綱の元気な声に、宗一郎は我に返る。

「て、天子！ やばい、飯綱を追わないと——！」

その言葉で我に帰る天子。

「あ……い、飯綱！」

飯綱の姿が確認できないと解るや否や、天子はフリスビーの飛んでいった方向へと向かう。

だが、お守りに宿っていた際に見かけたのと同じく、青く光る電流が天子を阻む。

その衝撃に跳ね返され、宗一郎の胸にぶつかる天子。

「く——う」

思い出したかのように、天子は自らにかせられた制約に歯噛みする。

「お、おい天子……」

「僕は大丈夫だから、早く飯綱を！」

宗一郎の言葉を遮り、天子は叫ぶ。

気迫に気おされ、宗一郎は生返事のまま走り出していく——

できること、できないこと？（後書き）

オーバースローから放たれた円盤は、不可思議な軌道を描いて堤防の向こう、住宅街へと消えていく。

その後を追う飯綱。

彼方へと消えていく二つの影を、宗一郎たちは追いかける――

次回『できること、できないこと？』
どうぞ、ご期待あれっ。

できること、できないこと？

一軒家が立ち並ぶ、住宅街の路地。

ギリギリ車が一台通れる車道は見通しが悪く、注意していないと出会い頭に車とぶつかりそうだった。

しばらくして、とある路地を覗き込んですぐに目に付いたのが、道路の真ん中に横たわる子犬の姿だった。

数日前に洗ったばかりの身体は砂で汚れ、後ろ足は不自然によじれていた。

腹部はぱっくりと切れており、そこから血が出てしまったようだ。全身の血液がぶちまけられた血溜りの中に、子犬が静かに眠っていた。

鮮血がアスファルトの上を流れ、近くのブレーキマークに伸びていく。

子犬の血溜り踏んだのか、二本のタイヤパターンがスタンプのように道路に残されている。

車が子犬を轢いたのだろう。宗一郎はその現場を見て、すぐに理解した。

だが、赤く染まった子犬が飯綱と気づくまで、数秒を要した。

「ねえ、ソウイチロウ」

横たわる飯綱のもとに降り立った天子が、問いかける。

「飯綱、動かないんだけど、どうしちゃったの？」

宗一郎は一瞬、死んだという言葉を読み込もうとした。

死んでない、眠ってるだけだ。

そうやって誤魔化そうとしたが、やはり出来なかった。

天子は神様であっても、子供ではない。

まして神様に嘘をつくなんて、意味がない。

きつと天子も、飯綱が死んでいることをなんとなく解っているはずだ。

「天子……あのな、飯綱は、その」

天子を傷つけないように、慎重に言葉を選ぶ。

「フリスビーを追いかけてる最中に、その時にきつと、車に、轢かれたんだと思う」

「轢かれたら、動かないの？　ねえ、何で轢かれたら動かなくなっちゃうのさ」

「轢かれたら、動かなくなるんじゃない」

キュツ、と喉が鳴る。

一度出そうとした言葉を無理矢理戻そうとした。

だが、それを宗一郎自身は許さなかった――

できること、できないこと？（後書き）

白と茶の毛は、赤に染まっていた。

細き手足は動くことなく、生命は鼓動を止めていた。

「飯綱が……？ 嘘でしょ、やだなあ、もう」

天子は呟く。

その亡骸の前で――

次回『できること、できないこと？』

どうぞ、ご期待あれっ。

できること、できないこと？

「死んだから動かないんだ。轢かれたから、死んだんだ」
まるで時が止まったようだった。

「飯綱が……？ 嘘でしょ、やだなあ、もう」

天子は、ふらふらと命尽きる蚊のような危なげな動きで、飯綱に近寄る。

「飯綱、起きてよ飯綱。ねえ」
ペシペシ。

軽く叩いて見せるが、飯綱は起きるそぶりを見せない。

「飯綱——飯綱、うそ……そんなの、嫌だ」

両手で拳を作り、声を振るわせた。

「嘘だ、嘘だ！！」

瞬間、突風が巻き起こる。

ビル風のように横なぎの風が生まれ、そしてそれが天子を中心に渦巻いていく。

「僕は、僕は、天之子之命！ 遠からん者は音にも聞け、魂よ！！」
天子の体から、眩しいほどの光が生まれる。

彼女が太陽であるかのように、天子を中心にして白く塗りつぶされていく。

宗一郎には、かろうじて天子の姿が見えていた。

「飯綱、僕の声に応え、ここに戻れ！」

一層、風が荒々しさを増した。

大気を震わせ、周りの木々がざわめく。

「戻れ、戻れ、戻れえええ——！！」

強く叫ぶ。

もはや突風を超えた現象のせいで、目を開けることさえ困難になっ
ていく。

その最中、僅かに見えた光景に、宗一郎は自身の目を疑った。

天子に翼が生えていた。まるで絵画に描かれた天使のような、白い大きな翼を。

だが、それも一瞬の出来事だった――

できること、できないこと？（後書き）

吹き荒ぶ風、荒れ狂う光。

鉄骨が落ちてきて以来である、天子の力を目の前にして、宗一郎は脅威を感じていた。

彼女の無邪気な笑みが、彼女の拗ねたふくれっ面が、宗一郎の胸から剥がれ落ちていく――

次回『できること、できないこと？』
どうぞ、ご期待あれっ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5990y/>

おももりやどり

2012年1月12日18時58分発行